〔新刊紹介〕

山下久夫氏著

# 『本居宣長』〔コレクション日本歌人選058〕

荻田　みどり

『古事記伝』や『源氏物語玉の小櫛』など、日本古典文学の研究史に大きな功績を残した本居宣長。彼が詠んだ和歌は、戦時中、（本人の意識とは離れて）国粋主義喧伝のために利用された「敷島のやまと心を人問はば朝日ににほふ山桜花」をはじめ、約一万首に上る。しかし、その詠みぶりについては、小林秀雄や中野重治が大いに首をかしげるところである。

本書は、二〇一一年より刊行を開始した「コレクション日本歌人選」（全六十巻）の一冊として、厳選された本居宣長の和歌を手軽に堪能できるように編まれている。ただし、著者、山下久夫氏が自著解説や凡例で述べるように、その選歌基準は、これまでの和歌選集とは全く異なる。宣長の「下手な歌詠み」という評価を覆すために、著者が苦労して選んだ秀歌四十五首ではない。「宣長にとって歌とはどのようなものか」という、宣長の思想を辿るための一冊である。上手下手の評価に止まらない、宣長の和歌に焦点を当てた、初めての書ではなかろうか。

この書の特徴的な選歌の一つが、享和二年（一八〇二）刊『枕の山』の桜花三百首の連作から選ばれた十五首である。宣長は桜の花を愛し、あらゆる情景、時季、場面において桜を詠んだ。宣長にかかれば、夏の蛍さえ、桜と取り合わされる。さながら、葛飾北斎が描いた「富嶽三十六景」の桜版である。

最初は、一首ずつ鑑賞するのではなく、山下氏編纂の「宣長歌集」の流れに身を任せてみる方がよい。『枕の山』の連作も、その流れの中で、「散ればこそいとど桜はめでたけれ」とする古来の桜観とは異質で、頑なに独自の路線をゆく、宣長の桜への執着が見えてくる。

『新古今和歌集』を重視する宣長だが、万葉風、古今風、新古今風など、多彩なテイストの和歌を詠み分けている。山下氏は、それらの和歌から、「「日本語（やまとことば）」という普遍的な視座」をもって詞と対峙する、宣長の考え方を紐解いていく。一首につき二ページ乃至四ページという紙幅の制限はあるものの、三十一文字に集約された和歌を中心に、国学者宣長の経歴や他の著作との関わりを含めて解説されており、宣長の人となりが、立体的に浮かび上がってくる。宣長研究はもとより、宣長の注釈を読み解く上でも、新たな視座を示してくれる一書である。

（笠間書院、二〇一二年七月、B6版、一一〇頁、定価一二〇〇円＋税）

（おぎた・みどり　本学博士後期課程）